

日本語特別教育 Special Japanese - Program A, B, C

広瀬 正宜 ・ 鈴木 庸子

1. 序 帰国生対象の JLP (Special Japanese)

毎年 90 名ほどの帰国生が入学してくる。9 月生の 4 年本科生のほとんどである。彼等の日本語能力はさまざまで、9 月入学式後にプレースメントテストを行い、5 つのグループに振り分けている。(1) 日本語があまりできない学生は普通の日本語のクラスの適当なレベルに入ってもらい、(2) 日本語の読み書き能力がほぼ小学生の中高学年から復習が必要な人たちはスペシャルジャパニーズ プログラム A、(3) 読み書き能力がほぼ中学入学レベルから復習が必要な人たちはスペシャルジャパニーズ プログラム B、(4) ほぼ高校入学レベルの日本語力の人たちはスペシャルジャパニーズ プログラム C (5) それ以上は免除である。

一般に帰国生は、話し言葉は敬語表現も含めかなりできるが、漢字、語彙、表現を増やすことと、読み書き能力の向上が急務である。それに、日常生活の上で日本人の大人としての常識、マナーなどもひととおりに知っておく必要がある。そうしないと、ICU では通用しても社会では通用しないことがある。ICU は日本社会へのソフトランディングの場所でもあるのだ。

2. コースの目的

スペシャルジャパニーズは、簡単にいえば帰国学生の日本語力の不足を補うことを主目的に編成されたプログラムということになるが、他の JLP 科目と同様、ICU において日本語で学生生活を送るのに支障のない日本語力をつけることとともに、リベラルアーツの一環としての日本語教育として存在している。すなわち単に語学力を備えるだけでなく、日本語を学ぶことを通してさまざまな知的訓練を行い、次代を担う知識人として豊かな教養を身につけるための基盤をつくるものとして、大学のカリキュラムの中では 9 月に入学する学部 1 年生のための導入教育と位置付けられている。

3. コースの編成

スペシャルジャパニーズは長い間、秋学期、冬学期、春学期にそれぞれスペシャルジャパニーズ 1, 2, 3 が開講され、9 月の日本語力テストの結果によってスペシャルジャパ

ニーズの1、または1と2を免除されて途中からコースに合流する、という方式がとられていた。すなわち、レベルに応じて秋学期から春学期まで（スペシャルジャパニーズ1～3）計9単位とる人と、冬学期と春学期（スペシャルジャパニーズ2～3）の計6単位の人と、春学期（スペシャルジャパニーズ3）だけ3単位の人、全然とらなくてよい人という分け方で行われていた。この合流方式ではレベルの上の人たちは秋学期1学期または秋・冬学期の2学期間日本語を勉強できないことになり、レベルの上の人たちは足留めをさせられていることに不満が多かった。導入教育としての役割が十分に果たせていなかったのである。9月に入学した時からレベルに応じて力をつける方がはるかに教育的なので、1997年に現在のカリキュラムに変更した。以下、この報告では1997年以降のコースについて扱う。

現行スペシャルジャパニーズは、どのレベルも9月に一斉に始まる。プログラムAは週3コマ3単位を秋・冬・春の3学期間（9単位）、プログラムBは週2コマ2単位を秋・冬・春の3学期間（6単位）、プログラムCは週2コマ2単位を秋・冬の2学期間（4単位）である。プログラムAは週3コマを漢字・語彙の練習、文章読解、文章の書き方にわけて行い、プログラムBは漢字・語彙の練習、読解と書き方、プログラムCは読解と書き方を中心に行っている。どのレベルにおいても、書き方の最終目標は日本語で論文が書けることであるが、常識として知っておくべきあらたまった手紙、依頼状、礼状などの書き方も含めている。

1プログラムの学生数は20人から30人になることが多く、すべてのプログラムに2セッションが用意されて1セッション10人から15人程度の登録者数となる。

表1 コースの編成

プログラム	コマ数/週	学期数	単位数/年	人数(2003年度)
A	3	3	9	17人
B	2	3	6	19人
C	2	2	4	35人

3-1. プログラムA、B、Cの違い

各プログラムに登録する学生は、入学時に行うプレースメントテスト（免除テストと呼ぶ）の成績をもとに、それぞれのプログラムに振り分ける（「プレースする」と言う）。

プレースメントテストは、漢字、語彙、読解の多肢選択形式問題、筆記の漢字書き問題、筆記の論述テストの3種類があり、その得点を総合して振り分けを判定する。さらに、アンケートによる、高校卒業時までの日本語接触、日本語学習や日本の学校教育の経験を加

味する。

プレースメントテストの内容は、まず、教育漢字から常用漢字までを含む漢字の読み書きを問う多肢選択問題である。とくに教育漢字の書きは筆記テストも行う。次に、四字熟語を含む単語力、長文読解問題による読解力を測るための多肢選択問題である。作文力は、筆記の論述テストを課す。テーマは大学生活への希望、高校時代を批判的に振り返ることなどを扱う。プログラム A、B、C の判定の基準は、漢字・語彙・読解テストで 20 点以上 44 点以下がプログラム A、45 点以上 56 点以下がプログラム B、57 点以上 69 点以下がプログラム C、さらに 70 点以上の場合にはスペシャルジャパニーズを受講する必要がないと判断されて、受講を免除される。逆に 19 点以下の場合には、スペシャルジャパニーズのコース受講には日本語力が不十分と判断し、外国人のための日本語コースである日本語または集中日本語のコースを受講する。上記の点数の基準は、めやすであり、この点数と漢字の筆記テストおよび筆記の論述テストの結果を総合し、3 名以上の担当教員の合議によって、各学生の受講プログラムを判定する。

筆記の論述試験のプログラム A、B、C の判定の基準は、主観的な要素もあるが、およそ次のようなものである。まず、日本語母語話者の文章と認定できない場合は、一般の日本語、集中日本語コースの受講を考える。日本語母語話者の文章と認定できても、書き言葉を使うことができず、抽象的な単語を使うことができない、また論理展開を示す接続詞などを使えていない場合は、プログラム A と判定する。書き言葉を用いて論理的に事実や意見を展開でき、十分に書きなれている、また内容的にも必要なことがらが十分に展開できていると判断された場合はプログラム C である。プログラム B はその中間である。論理展開、語彙、文章のすべてにわたって、スペシャルジャパニーズのコースを受講する必要がない場合には免除と判定する。

おおまかには、日本の小学校までを卒業せずに海外にわたりそのまま海外の教育を受けた場合はプログラム A、中学校まで日本の公教育をうけていればプログラム C と判定されるのがめやすだが、必ずしもそのとおりとはいらない。

表 2 判定の基準

プログラム	漢字・語彙・ 読解テスト (88 点満点)	漢字筆記試験 (12 点満点)	論述テスト	日本の公教育 経験のめやす
A	22~44	—	話し言葉的。	公教育経験なし
B	45~56	—	書き言葉使用。語彙数が少 なく論理的な展開が未熟	小学校まで終了

*漢字筆記試験は規準点をもうけず、めやすとして用いる。

4. 各プログラムのカリキュラムと内容

4-1. プログラム A

プログラム A では、週 3 コマのうち 1 コマを漢字、1 コマを読解、1 コマを書き方にあてている。各コマは月、水、金の 2 限および 4 限に生まれ、2 限はセクション A、4 限はセクション B の学生が受講する。このカリキュラムは 3 学期間共通である。

漢字のコマは「*Kanji in Context* (中・上級学習者のための漢字と語彙)」vol. 1 & 2 (The Japan Times) を教科書として用い、1 コマで平均 50~60 漢字とその漢字を用いた単語を学ぶ。単語を示しながら日本歴史や日本社会などの問題に話題が発展することがある。読解のコマは、新聞の社説程度の読み物からはじめ、新書の 1 章程度、あるいは小説の 1 章程度を 1 週間かけて読み、内容に関する質問に文章で答えを書いて授業に参加する。授業は読んだ内容についての討論を中心とした活動となる。宿題として課す読解のほかに、毎時間、授業の初めに新聞記事を読む。この記事の音読と内容についての質疑や意見交換を通して、日本社会に関する知識を得、同時に日本語による口頭発表に慣れる。

書き方のコマでは、敬語を用いた手紙の書き方のような実用的な内容に簡単に触れた上で、日本語による論文の書き方の指導を行う。「大学生と留学生のための論文ワークブック」(くろしお出版) や「日本語の書きかたハンドブック」(くろしお出版) などを教科書として使用し、書き言葉の使い方、形式、わかりやすい文の構成、わかりやすい文章の構成などを学ぶ。実践として毎週短い宿題が課されたり、1 学期に 1 度か 2 度のレポートが課されたりする。

3 学期目に論文作成が課される。論文作成では、論文の内容の口頭発表(いわゆるプレゼン)も同時に課し、レジメや OHP などの準備、口頭発表の仕方を指導する。口頭発表の指導用のビデオ教材を用意している。

以上のほかに、特色ある課題としては、1 学期目の「インタビュープロジェクト」がある。これは、敬語を使った会話の実践を主眼に組まれたもので、目上のあまり親しくない人に対して、インタビューを行い、その内容をレポートにまとめると同時に口頭発表するというものである。相手の人格や社会的な職業に積極的に触れる初めての機会となる場合もあり、学生が学ぶものが多い。

4-2. プログラム B

プログラム B では、週 2 コマのうち、1 コマを読解、1 コマを書き方にあてる。各コマは水、金の 2 限および 4 限に生まれ、2 限はセクション A、4 限はセクション B の学生が受講する。読解はプログラム A と同様に、事前に課題の読み物と宿題を渡し、授業では内容に関する討論を行う。課題の記事は、論文記事、新聞の社説、論説、コラム、雑誌記事、新書の一部、小説の一部、エッセイや紀行文の一部などである。

書き方のコマでは「大学生と留学生のための論文ワークブック」(くろしお出版)、「日本語の書きかたハンドブック」(くろしお出版)、「レポート・論文の書き方入門」(慶応義塾大学出版会)などを教科書として使用し、プログラム A と同様、論文の書き方の指導を行う¹⁾。2 学期目に、8000 字から 10,000 字程度の論文作成とその口頭発表を行う。口頭発表にあたっては、プログラム A と同様に、事前にレジメや OHP、パワーポイントの準備、口頭発表の仕方を簡単に指導する。1, 3 学期は論文より短いレポートを課す。

漢字学習は「注解書き取り・読み方テスト」(日栄社)を教科書として自習とし、毎時間 2 ページ 40 単語分の小テスト(漢字クイズと称する)を行う。テストの内容には、漢字の読み書きと意味を適当な配点で含めているが、書きのみ、読みのみの場合もある。次のテスト範囲の中に、特に注意を喚起する必要があるものが含まれている場合は、簡単に指導する。この教科書で扱う漢字四字熟語については、学生に意味を調べさせ授業で発表するという課題を課す場合もある。中間テストや期末テストの前には特に漢字四字熟語の学習の便宜をはかるために、練習問題を渡す場合もある。

以上の課題のほかに、毎時間、新聞記事の読みあわせを行っている。これは、当日または当日に近い日の新聞記事を毎時間の漢字クイズ後に、読み合わせるものである。社会的な問題について各自が考え、また日本社会について意見交換をする機会となる。

4-3. プログラム C

プログラム C では、プログラム B と同様、1 コマを読解、1 コマを書き方にあてる。各コマは水、金の 2 限および 4 限に生まれ、2 限はセクション A、4 限はセクション B の学生が受講する点もプログラム B と同様である。カリキュラムの基本もプログラム B と同様であり、読解授業の方法や新聞記事の扱い、漢字学習の方式も同じである。ただ、プログラム C は 2 学期間だけでコースを終了させるため、1 回に自習しなければならない漢字語彙数が、プログラム B より多くなっている。

プログラム C は基本的にプログラム B の内容を凝縮して短期間に終わらせる、というものである。したがって、論文作成とその口頭発表は 1 学期目に行う。

表3 プログラムの概要

	漢字教科書	漢字教育	読解	書き方	論文執筆時期
A	Kanji in Context	授業1コマ	授業1コマ	授業1コマ	3学期目
B	注解書き取り読み方テスト	自習	授業1コマ	授業1コマ	2学期目
C	同上 または 漢字書き取り 読み方標準問題集	自習	授業1コマ	授業1コマ	1学期目

5. 成績の方針

成績は、漢字の小テスト、読解の宿題、書き方の宿題、中間期末のテスト、レポート、論文、口頭発表などの成果を総合的に判断して決定する。この10年間の流れを見ると、漢字や読解宿題などの書き言葉から、口頭発表のような話し言葉への比重の変化が見られるが、基本的には学期中の活動全体を見て判断する、という方針である。

6. 4月入学の帰国学生に対する処遇

コース運営に関する技術的な問題であるが、4月にICU高校より入学する4月本科生（4月に入学する学位請求学生）も、9月からのスペシャルジャパニーズコースで受け入れている。その学生達は、帰国学生としてICU高校に入学しており、大学入学時点で日本語学力の面で指導を要する場合がある。そこで4月入学時に、9月入学の帰国学生と同様のプレースメントテストを実施し、その得点によって9月からのスペシャルジャパニーズコースを受講させることになっている。

7. スペシャルジャパニーズコース運営にあたっての留意点

ICUの帰国学生に関する調査としては、山下・石垣（1991）があり、またスペシャルジャパニーズコース運営にあたっての留意点は、基本的には中村（2000）に述べ尽くされていると思われる。学生の背景の多様性、日本語力の多様性、日本語との接触の度合いの多様性、生育環境下における家族の考え方の多様性、受けた教育の多様性、育った社会環境の多様性など、すべてにわたって多様であり、個性的である²⁾。担当教員は、多様性に対して関心をもち、とくに背景となる社会の教育制度や社会的価値観などについて、自らも学びつづける必要があると思う。

コースの目的としては、2学期または3学期のコースが終わったときに、「帰国学生だから漢字ができない、新聞も読めない、きちんとした話し方ができない」というような自信

のなさをふっきることができ、新聞を億劫と思わずに読み、新書 1 冊をどのぐらいのエネルギーで読めるか自らの力を自覚し、わからない言葉があったときにおっくうがらずに辞書を調べる習慣が付き、気後れせずに合格点以上の内容で授業で口頭発表に臨むことができることが最低線の目標ではないかと思う。

注

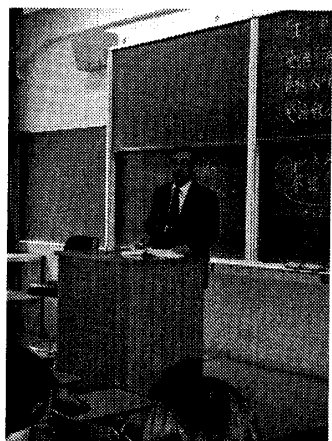
1. 多様性の一端を示すために、学習に対する不安感を調査したところ、漢字学習に不安をいっている学生が 19 名中 2 名、2 学期目に行う論文作成に対して「楽しみだ」と回答した学生が 4 名、「楽しみだが心配だ」と回答した学生が 9 名、「心配だ」と回答した学生が 3 名、「大変だから書きたくない」と回答した学生が 4 名である。(2003 年度スペシャルジャパニーズプログラム B コース 1 学期目終了時に行ったアンケート調査の結果)
2. 2003 年度スペシャルジャパニーズプログラム B の学生による論文のタイトルを例として挙げると、「日本の食文化」「意識の中のカースト」「武士道の精神」「環境と電気」「あたりまえ」「宮沢賢治「ユートピアの文学」」「増え続けるいじめ、登校拒否、未成年犯罪」「アジアとヨーロッパの星座の比較と、社会または文化の影響」「「ハイ」: 神秘の世界」「『砂の女』の分析」「外務省に消された日本人」「何が良い子を過食症にさせるのか」「世界の目から見る日本漫画とアニメー外国への日本漫画・アニメの影響」「ヒトから人へ」「親と子供としつけ」「学力低下とゆとり教育」などであった。

使用教科書リスト

- “*Kanji in Context workbook vol.1, vol.2*” (1994) Koichi Nishiguchi, Tamaki Kono, The Japan Times
- 『注解書き取り・読み方テスト』(1982) 日英社
- 『漢字書き取り・読み方標準問題集』(1999) 旺文社
- 『日本語の書きかたハンドブック』(1986) 稲垣滋子 くろしお出版
- 『大学生と留学生のための論文ワークブック』(1997) 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子、くろしお出版
- 『レポート・論文の書き方入門』(1997) 河野哲也、慶応義塾大学出版会

参考文献

- 小澤伊久美・丸山千歌・廣瀬正宜・中村一郎・中川健司（1997）「大学における『帰国生のための日本語教育』の学習目標—ICUでのニーズ調査より」『平成9年度 日本語教育学会春季大会予稿集』 p.57-62
- 中村一郎（2002）『日本語特別教育』担当者への覚え書き』『ICU日本語教育研究センター紀要 11』 p.61-64
- 中村一郎（2002）『日本語特別教育 プログラムB』報告書』『ICU日本語教育研究センター紀要 11』 p.64-68
- 廣瀬正宜（1997）「ICUにおける帰国学生に対する日本語教育について」『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念』 p. 809-810
- 廣瀬正宜・中村一郎・小澤伊久美・丸山千歌・中川健司（1996）『ICU帰国本科生に対する日本語教育プログラム開発に関する研究：スペシャル・ジャパニーズカリキュラム検討報告』（国際基督教大学）
- 丸山千歌（1998）「帰国生のための読解教育—構成と論拠の読み取りを中心としたクラス活動—」『小出記念日本語教育研究会論文集 6』 p.47-58
- 山下早代子・石垣貴千代（1991）「大学で学ぶ帰国生の実態調査—国際基督教大学の場合」『ICU日本語教育研究センター紀要 1』 p.179-200



広瀬 正宜



鈴木 庸子

授業風景（2003年秋学期）